

## トルストイの事

一、二カ月前中国の新聞は、トルストイの著作がロシア社会主義政府に禁止され、そして書籍を壊して紙を作り、改めてレーニンの著書を印刷するのだという記事を書いた。当初はみんな信じようとせず、けんめいに弁護する人まで出た。わたしもヨーロッパ、アメリカ帝国主義のデマだと思ったが、近ごろロシアの官界の消息では、禁止は確実だが、それで還魂紙(再生紙)を作ったかどうかは疑問であるということだ。同じような物を信奉して金科玉条とする大衆の中ではこうしたことは有りうることで、本来奇とするに足りず、トルストイの著作が壊されるのは何も今日にはじまったことではない。われわれが代って不平を言うことはない。わたしがこの事で思い出し、ちょっと話してみたいのは、もう一人別のトルストイの事である。

いわゆる別のトルストイとはアレクセイ・トルストイ(Alexei Tolstoi, 1817-1875)である。彼は詩人・劇作家で、又小説も書く。もっとも有名なのは『白銀侯爵』(Knaiz Serebriannyi)、——十六七年前わたしが訳して古文にし、上海の書店に送ったが、彼らもすでに訳したので、返すという返事だった。後になって『不測の威』が現われ、この書だということだったが、わたしの訳本はひとに持って行かれ、その後失われてしまった。これは彼の著作が中国と関係したわずかな因縁である。この事の他にはわれわれは何も知らない。近ごろドイツのケーベル(Koebel)博士の小品文集<sup>i</sup>を読んで、ようやくざっとトルストイの思想を知り、大きな敬意を払うことになった。一八七四年イタリアのグーベルナティス(Gubernatis)教授が列伝体の文人辞典を編もうとして、各人の自叙略伝を求めたところ、トルストイの返事の中に、“簡単に自分の好きなよう一言お答えしますと、わたしのロシア文学における位置を知らせてくれるのは、わたしは一部の人から迫害されていますが、又別の一部の人からは愛されているということです。この他にも奇怪な事があります。一方では政治上の逆行者と見なされ、もう一方、権威ある社会ではほとんどわたしを革命家と考えていることです。”<sup>iii</sup>彼は後で又説明して、“わたしの著作の中の倫理的な基調及び根本的な情調は、簡単に言うことができます。一方では専制政治に対する憎悪、別の一方では努力して劣悪なものを持ちあげ、優良なものを抑える偽の自由主義に対する憎悪を——表示していることにあります。この二重の憎悪はわたしに一切の圧政専断に対して、それがどんな境地にあれ、どんな形式と名義であれ、すべてに反対を表示させます。”<sup>iiii</sup>われわれは文化の最高の場所に立つ精神上の貴族主義者のその主張が一切の圧政専断に対する憎悪と反抗に他ならないことを信ずる。ならばこのアレクセイ・トルストイは真に景仰すべき人であり、そしてわたしから見ればかの禁欲の弟よりももっと親しむべきように思える。

ダーウィンの『種の起源』がロシア語に訳された時、検査官はその出版を禁止しようとした。ダーウィンの言うことが聖書の土をこね人間を作ったというのところがうからである。トルストイはその消息を聞いて、一通のユーモアに満ち又厳正でもある手紙を検査局長のロンギノフ(Mikhail Longinov)に送った。その文に云う。<sup>iv</sup>

“ミハエル兄、ダーウィンの学説があなたを非常に驚愕させ悩ませ、彼の翻訳の伝播を禁止しようとする所まで行っていると聞きましたが、それはほんとうでしょうか。どうか一言言わせて

下さい。ミハエル兄、よくよくお考え下さい。足下の後には一本のしっぽが生えているとは限りません。ならば大洪水以前には有ったかもしれない事について、なぜこのように急かれるのですか。人類というものは、それがやったことはただ種を撒いただけかもしれません。その種からできた果実については彼は責任を負わないのです。コペルニクスの説はすでにモーゼとはちがいます。足下には——古代ヘブライの伝説に対してわたしの乳母と同様畏敬の念を抱いておられる足下から見れば、ガリレオも検査局によって禁止されなければならないでしょう。しかしもし理性の呼びかけを聴き、一切の学問がいかなる禁制も忍受することができず、完全な自由の下でこそ繁栄できることを承認するならば、足下に何の権利があって禁止を宣告することができるのでしょうか。創世の時あなたはその場においででしたか。なぜ人類は一定してしだいに現在の形状に変わることができないのですか。足下は又造物主の仕事について彼にこれよりもっとよい方法を指示したいわけではないでしょう。神がどのように仕事をし、どのように創造し、なぜ創造するのかは、又まさしくあのように創造して他のようではないのか、これらの事はたとい検査局長でさえ到底知ることはできません。しかしわたしが知っている所、そして足下に一言したいのは、つまりダーウィンを異端として迫害を加えるのは、反って足下をして多少とも異端気味を持たせるのではないかというのがそれです。なぜでしょう。『創世記』に言う方法以外に人類を造ることができないと主張するのもまた異端であるからです。しかもダーウィンよりもっと悪性の異端です。これでは神の全知全能を制限することではありませんか。まるで神はこのようにし人類を造らざるを得なかった、しかも他の方法で造ることはできなかったと言っているようです。友よ、この結論はとても明瞭です。検査官の足下にとってはさらに特別危険です。けだし足下はこれによって始めて神の主たる属性を信任しないという悪例を創ったことになり、且つこれによってすこぶる教会が罰するおそれが生じ、おそらく極辺の修道院で年限一ぱい服役しなければならないということになるでしょう。

“あるいは生れて人類となった足下の威厳がダーウィンのサル説によって侮辱を感じられたからでしょうか。わたし個人から見れば、土くれの祖先がサルより高貴には見えませんが。——

“しかしこれらについてはしばらく言いますまい。ダーウィンがそこででたらめを言っていることはあるいはあるかもしれません。ただそれによって彼を迫害するのは、実に百倍のでたらめでありかつにくむべきことです。又あるいはあなたは彼の学説から虚無主義の旗印を見出したのでしょうか。だとするとそれはほんとうに奇妙なことです！虚無主義とダーウィンにはどんな共通点があるのでしょうか。この両者は相反するものではありませんか。ダーウィンはわれわれを動物状態から人間の境地に高めようとしています。虚無主義者は人間を動物の状態に押し下げようとしています。彼ら自身がサル説の生きた証拠です。彼らの性質と粗暴な動作の中に隔世遺伝の最も明瞭な兆候を見てとることができます。彼らは今でもすでに汚穢、愚蒙、無知、傲慢、粗忽で、人を咬もうとしています。もう一步進めるなら、この動物状態への復帰の事業は成功するでしょう。——女人、牧師の妻と娘もみなダーウィンを研究するようになりましたが、この件で足下は少しも焦ることは有りません。それはただ王侯の衣装を着ていかめしそうに闊歩する連中と同じ種類のサルでしかないからです。この罪も決してダーウィンその人にあるものではありません。

ん。ミハエル兄、わたしの話を聞いて、腹を立てないで下さい、あの気の狂ったような牧師の娘たちのせいでダーウィンを迫害しないでください。

“良き友よ、もう一言あなたにお知らせしなければなりません。われわれロシア人は決して支那の万里の長城のようなものでわれわれを他の国民から隔離しようとはしません。だからあなたが門を閉しても、学問はやはり音も立てずわが国に進出して来ます。学問というものは、まことに大胆なもので、あなたの検査局の決議や禁止など顧慮せず、やはりその光明を散布します。だから良き友よ、あなたが彼を脅迫しようと、古ぼけたコルク栓でその潮流を塞ぎ止めようとしたところで、あなたは決して成功しないでしょう。”

後になってダーウィンの書は果して禁止にならなかったが、多くの人の推測では、この書簡と多少の関係があるということだ。われわれはもちろんトルストイの寛大な胸懷を景仰するが、ミハエル局長にも一点の知識があったことに佩服せざるをえない。

ロシア人は宗教的国民である。いまでは制度は変って、神、聖書は信じないということだが、これはかの旧いやり口がなくなったというにすぎない。新しいミハエル局長はまだ検査局で決議し禁止していて、今度はトルストイの弟(レフ・トルストイ)に番がまわってきたことを、われわれはやっと知ったのだ。依拠するものは何か。神、聖書は、当然そうだ。だがこれは当然新しいやり口である。これは少しも奇とするに足りない、しかも他人の家の事で、われわれと何の関係がある。われわれはやはり自分の事を述べよう。中国人は——非宗教的国民である。それが他国人とちがうのはただそれが信奉するのは護符であって神ではないという点だけである。それは宗教以前の魔法であり、宗教的熱狂に至っては必ずしももっと少いというわけではない。それはロシアよりもよいか。わたしはたとえ十分国を愛していても敢えて言わない。平和、寛容を愛する、これらはいずれも自己称賛の言葉であり、わたしは敢えて附和しない。わたしは中国人の大欠点は服従と圧政を喜ぶことにあると思う。最も欠けているのは一切の専制に対する憎悪である。ロシアにはミハエル局長がいるが、アレクセイ・トルストイもいる。中国は街中がミハエル局長(しかもあの一点の知識はない)だから、わたしはロシアの禁止事件に対して敢えてどんな批評もしない。やはりわれわれ自身はまだ一言二言言える時に乗じてしっかりこの機会を利用しよう。

アレクセイ・トルストイの手紙の虚無主義者とは当然クロポトキンの『自叙伝』に言うのとは同類ではなく、『父と子』から『蒼ざめた馬』の中で描かれた英雄は、たとえ愛すべきでなくとも、やはりどうしても敬うべき人である。しかしながら天下の魚目は常に真珠よりも多いため、虚無主義はかくてほとんどサルの特売する所となった。トルストイの地位はちょうど庚子の年の聶士成<sup>ノ</sup>のようで、実に同情に値する。いまはかの弟でさえ禁止である。ならば彼の文集はあるいはとっくに更紙になってしまっているかもしれない。

民国十四年二月五日。

※初出：1925年2月16日『語絲』第14期

---

i, ii, iii, iv ケーベル博士の小品文集 『ケーベル博士続々小品集』久保勉訳 岩波書店大正十三年九月初版 書中「文学に於ける驚嘆すべきものに就て」という文章はケーベルの「アレクセイ・トルストイ論」で、周作人の議論はほとんどこれ、特にその第二章第一節「アレクセイ・トルストイに就いて」に負っている。引用部分は順に該書の p. 207, p. 209～210, p. 223～229 である。

v 聶士成(1836～1900)、字名は功亭、安徽合肥の人。清末の軍人。日清戦争での働きで、直隸総督となり、改編された清朝の軍隊武衛軍、中でも最も精鋭であったとされる第一軍を率いた。義和団を暴徒として鎮圧したが、清朝上層部の不興を買い、味方から足を引っ張られ、一方八国聯合軍とも対抗せねばならず、腹背に敵を受けることになり、結局天津郊外の黄村・廊房の戦いで戦没した。『清史稿』では八国聯合軍との戦闘でなくなったようにも読めるが、一説では義和団と内通した直隸練軍の兵変によって命を落としたとも言われる。周作人が聶士成についてどのような情報を得ていたのかは未詳。